



第43号

令和7年
5月11日発行題字/飯塚大幸一畑薬師管長
龍図 引野里佳作

引野里佳作龍図 一畑薬師ビジターセンターの正面の看板に、島根半島を象徴する龍図の作成を依頼した。龍の夢を見てから龍図製作を始めたと聞いているが、龍2頭が玉を間に泳いでいる。大芦の荒神さんは、川の近くの竹やぶと垣ノ内集落山上の2社に藁蛇が祀られていて、それぞれ雌・雄とされている。島根半島の浦々には頭が八つあったり、様々な伝承が入り混じっているが、古くからの祈りの形である。



四十二浦巡り
一畑薬師ビジターセンターに寄せて

木幡 育夫

四十二浦巡り信仰の研究活動を始めて十五年が過ぎた。研究会設立を提唱された古代史研究者関和彦氏は、武蔵坊弁慶が四十二浦巡礼の生みの親と話されたことがある。しかし当時中海の孤島だった大根島に、何故「出雲四十二浦之垢離取歌」の版木があり、そのように四十二浦巡礼が当時は中海の孤島で流行っていたのだろうか。境港市民図書館にもその摺りものが保存されている。四十二浦巡礼の存在については、関和彦著「古代出雲への旅」にその経緯が詳しく書かれている。

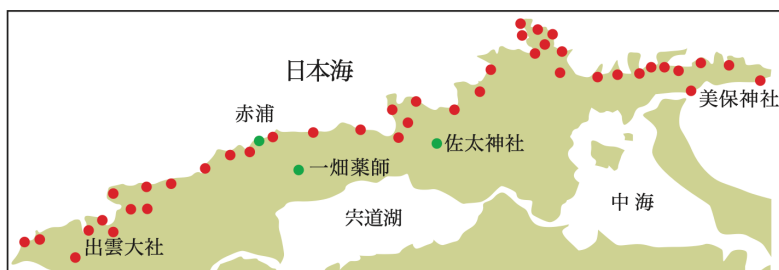
こうして島根半島の歴史文化再発見の旅を広報普及してきたが、島根半島宍道湖中海ジオパークの認定もあり島根半島訪問者も増えて、旧来の民宿もほとんどが経営を続けて、新たにジオサイトを案内する小伊津ビジターセンターが前佐香コミニティセンター長により私財を投じて開設されている。

また、片江浦ではゲストハウス「かたゑ庵」が開店している。宿泊もできるし、沿岸の島を巡るカヤック体験もできる。

島根半島の四十二浦を訪ねる旅は、また島根半島の北山を越えて、展開する海辺を楽しむ世界でもある。出雲大社から美保神社まで、日本海沿岸に浦々をつなぐ道路があり、江戸時代に比べればとても便利な巡礼の路になっているのである。出雲国ジオガイドの会も登録ガイドが六〇名を超えており、島根半島は国引き神話の昔から沿岸への道は限られているので、浦々の神社もジオサイトも、このガイドの案内で円滑な旅をすることが出来る。

この島根半島の旅を紹介するため、四十二浦巡りの最終訪問地、結願の寺一畑薬師にビジターセンターを整備することにした。一畑薬師は、県外の訪問者が半数を占める島根県観光の窓口でもある。この一畑薬師の大駐車場で、松江市・出雲市の観光名所を紹介したいと考えた。また、身体の不自由な方々のため、現地を実感できるデジタルサイネージで映像により海岸風景、浦々の伝説・出雲の民話、出雲国風土記にある菓草、椿油の椿チヨコ・クロモジ茶など特産品も紹介したい。スサノオ伝説の奥出雲町・飯南町・雲南市等の神話の現場を紹介したいと思う。

(研究会事務局長)



【島根半島四十二浦巡りについて】

島根半島に古来伝わる「四十二浦巡り」と呼ばれる海岸(浦)で汐汲みし神社を巡り歩く信仰習俗があります。この四十二浦巡りは、江戸時代盛んに行われていたということですが、いつ、何のために始まったのかは不明です。島根半島巡礼の終点は、一畑薬師とされています。

没後七年目、関和彦先生を偲んで

吉山 治

関和彦先生が亡くなったのは二〇一九年三月三十一日、毎年関先生を偲ぶその命日は私の人生において、とりわけ特別な日である。

急逝されたその日、私は島根県職員として、東京事務所長を最後に三八年間の公務員生活を終えて東京から松江に戻った日であった。

三月三十一日はまた私の生き方に深い影響与えた隠岐の実母の誕生日でもあった。そして亡くなられた日から一か月後、時代は平成から令和へ変わったのである。関先生を偲ぶ日は自分の歴史、時代の変化など実に多くのことを振り返る日でもある。

関先生との直接の出会いには二〇一五年五月の第三十四回全国地名研究者大会（岐阜県大垣市）であった。翌年の長野県伊那谷の大会の後関先生が第三代地名研究所所長に就任、島根に深いご縁のある関所長の誕生により二〇一八年五月二十六日～二十七日、第三十七回全国地名研究者出雲大会（テーマ…出雲 神々をめぐる地名と風土）を開催、私は大会実行委員長として関わり地名大会の歴史に残る参加者総数約五百七十名を得て成功裏に終えた。私の人生の中で最大のイベントであった。東京勤務の当時、苦労も多かったが私と同じように毎回東京から参加、主催者として地

元実行委員と一緒に汗をかき準備に当たって下さった関先生のお人柄、高い見識、島根の風土への愛着が思い起こされる。

そもそも私の日本地名研究所との出会いは雲南六町村合併協議会職員として平成の大合併の現場にいた二〇〇二年九月五日に川崎市にある日本地名研究所を訪ねたことから始まる。新しい自治体の名前を決める場合には、地名を基本とするその地域の歴史文化を踏まえたものでなければならぬとの日本地名研究所の主張に共感したからである。今に思えば出雲国風土記の研究者、島根半島四十二浦巡り再発見研究を提唱された関先生との巡り合わせの糸はこの頃からつながっていたように思う。

二〇〇四年十一月一日「生命(いのち)と神話が息づく新しい日本のふるさとづくり」を掲げた雲南市が誕生、その後私は島根県を退職した後二〇二〇年十二月九日に雲南市副市長に就任、奇跡のようなご縁を再び頂き雲南市合併二十年を見届け四十四年に及ぶ現役最後の仕事を雲南市で全うすることが出来た。

そして自分の人生の最大の学びは何かと問われるなら、「人と地域」が大事、その人の営みと地域の変遷を古代からの歴史の中で学ぶこと、そこに未来を切り拓く鍵、様々な課題解決や地域の活性化のヒントがあるのではと思う。

関先生は島根県を舞台にそんな仕事を楽しくして多くの人を惹きつけてきた。関先生の顕

彰碑が一畑薬師にあり、この度一畑薬師ビジターセンターが有志の力で充実、再オープンする。関先生ゆかりの地を訪れ偲びながらいろんな事を思う。恵まれた自然環境を持つ我が国は地域の長い歴史を紡いできた、長い歴史の過去を振り返り、もっと長い未来に思いを馳せることで、目の前の現象だけに囚われず、元氣と勇氣を持って前に進めるのではないか、今はそんな事を思うのである。

（日本地名研究所理事）



松江の誇り 田和山遺跡 (4)

堀 眺

田和山遺跡について遺跡の性格や出土した武器、文化面で特筆される石硯について述べてきました。山陰の片田舎の遺跡がこのような重要性をはらんでいたことに疑問を持つ人も多いと思われます。今でこそ片田舎という評価ですが、弥生時代においては日本屈指の先進地帯だったので。そのことは出雲市から鳥取市にかけて弥生時代を代表する遺跡が連なっていることを知らねばなりません。

青谷上寺地遺跡は鳥取市の西、青谷地区にある弥生時代中期から後期にかけての巨大遺跡です。湿地に築かれた街は排水溝や木柵、貝塚、竪穴住居が並び、大量の木製品、骨角製品、脳を含む人骨などが発見されました。輸入した金属製品も見応えがあります。



山陰の弥生時代遺跡

妻木晩田遺跡も弥生時代後期から古墳時代にかけての日本有数の巨大遺跡で、460棟の竪穴住居、510棟の掘立柱建物、39基の弥生古墳や墓が確認されています。

西谷古墳群は弥生時代の古墳6基が尾根に連なっており、王朝が築かれていた

と考えられます。その墓室は木材で築かれ、朱を撒いた後、木棺が据えられています。中国式の木棺木槨墓で、日本で一番古い古墳だといえます。楽浪郡と交易して、文化的な影響を受けたと考えられます。国中の人々が集まって国王の巨大な墓を増築する、いわゆる古墳文化は出雲発祥なのです。

その直前には荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡にみられるように祭りで使っていた青銅器を集め、地中に埋めて神様にお返しした様相がみられます。弥生後期に王権が成立すると、それまで集落ごとに行われていたお祭りから王墓を地域全体で造築するという風に変っていったらしいのです。

下の図はこの時代の日本の様子、特徴的な祭りの道具や葬送儀礼を示したものです。九州や近畿では弥生中期に引き続いて、さらに大型化・装飾化した銅矛や銅鐸を用いた祭りが行われていました。また九州の倭では甕棺が主流で『魏志倭人伝』には倭人の墓は「棺ありて郭なし」と記されています。一方畿内は方形周溝墓が盛行しており、郭はなく石棺が据えられています。周りの溝から排出された土砂を積み上げた中央の土盛りの高さはせいぜい50センチほどで、西谷古墳の7、8メートルには及びもつきません。

田和山遺跡については細かく弁じてきましたが、宍道湖を守る神の降臨する場といえます。風土記の時代には宍道湖の四隅に神名火山(意宇の茶白山、秋鹿の旭山、楯縫群の大船山、出雲の仏経山)があるとされましたが、その前身と考えられます。

弥生時代後期には九州の倭地域が大乱を経て邪馬台国に統一され、中国と密接な関係を誇るように



なります(邪馬台国畿内説は取りません)。日本各地の情勢は神話の世界にどう反映されているのか、探ってみることも必要です。

古事記や日本書紀の神話の部分で出てくる地名のうちおよそ39パーセントは出雲地方、40パーセントは九州地方だそうで、出雲神話はスサノオから大国主が主人公で、やがて国譲

りの話に続いてゆきます。国譲りはスサノオの姉である天照大神が支配権を差し出すように求めたものでした。イザナギがイザナミから受けた汚れを洗い落としたのは日向の阿波岐原とされ、現在でもその地名は宮崎市に残っています。この地を治めたのが天照大神の子孫であり、やがて彦瀲の第四皇子が筑紫の宮より東征し大和州橿原宮で初代神武天皇として即位したと記されています。

大和政権が中国と接触したのは600年のこととされており、卑弥呼が「親魏倭王」の印綬を下賜された邪馬台国は宮崎に残った神武の一族が築いたものでしょう。

出雲は時代ははっきりしませんが国譲りで宮崎の天孫族の支配に屈した後でも繁栄していました。しかし、やがて古墳時代に東方から伸びてきた大和朝廷の支配下に入ってしまったと考えられます。

(田和山サポートクラブ 元会長)

私の履歴書③

酒井 董^{ただ}美^{よし}

島根大学法文学部言語文化学科のことなど

平成2年4月から筆者は島根大学法文学部助教授として勤務することになった。話があったのが2月。外国人に日本語と日本事情を教えるポストが文部省（現在は文部科学省）から認められたので来てくれと、筆者に白羽の矢が立ったのは、前年、講演をしたことから適任者だと認められたようである。事前の業績審査の結果、「業績の結果では教授で招くべきだが、この4月発令なので文部省には間に合わない。学長権限では助教授まで認められるので、取り敢えずこれで承知してもらいたい。次年度には必ず教授になつてもらうから」と言われた。筆者にしてみれば、助教授だろうと教授だろうと、大学で研究が出来るのであれば、こんなありがたいことはないという気持ちであった。

何しろ研究室が与えられ、そこには電話もあり、市外電話だろうと自由に使えるし、講義と教授会や所属委員会さえ出席すれば、後は学外に用事があつて、外出するのも、いちいち上司の許可を取って出かけるなくても自由である。やはり大学だと、このことはありがたかった。

大学はさすがに学生の質も高く、講義するのも楽しかった、今までの国語や社会科の授業とは違い、自分の研究してきた口承文芸を講義するのであるから楽しさが違う。島根大学では「日本事情」と「資料収集調査法」を自身の調査資料をテキストにして講義をしたが、平成5年度より近くの島根県立島根女子短期大学からも、非常勤講師を頼まれ、毎週講義に出かけた。ここでは「郷土文学特別講義」「郷土文学概論Ⅰ」の題目だったが、後には「山陰の民話

山陰の口承文芸論

酒井 董美著

三弥井書店

平成10年11月30日に発行
定価は本体8,900円（税別）

とわらべ歌」とストレートな講義題目になった。ちなみに県立短期大学の非常勤講師は、平成29年度（2007）までは続いたのであった。

また中四国大学教養教育委員会に出席したことから、高知大学人文学部からも非常勤講師を頼まれ、平成7年から5回にわたって集中講義に出かけた。集中講義というのは一週間、月曜日から金曜日にかけて、朝から夕方まで講義を行い、試験（レポート代用でも可）を行い、単位を与えるものである。この間は高知大学の教員宿舎に約一週間宿泊しながら講義をしたのである。その間、島根大学の講義は休講にして、後日講義を補充する形を取ることで問題なかった。

定年になった平成11年3月で島根大学は退官したが、翌12年から私立の鳥取短期大学教授となり、平成18年3月まで勤務したのであった。ここへは列車通勤であり、JR松江駅から倉吉駅まで乗車し、倉吉駅からはスクールバスで短期大学まで行くのであった。

ところで、島根大学法文学部言語文化学科に大学院を作ることになったが、そこで講義をするためには、そのため改めて資格審査がある。大学院設立のため最初は自学ではそれは行えず、外部の東京のしかるべき部署で行われた。

結果、筆者は「マルゴウ（〇合Ⅱ丸合）」で合格したのは痛快だった。丸合というのは大学院生に対して、講義もOK、論文指導もOKなのである。単なる「合」の場合は、講義は出来ても論文指導は認められない。今一つ不合格ということになれば、学部学生への講義は出来ても、大学院生への指導はできないということになる。不合格者がいたのかどうかは筆者の知るところではないが、丸合以外の合だけの者は存在していたようだ。

こうして筆者は中学校教師十七年間、高等学校教師十六年間、大学（短期大学を含めて）十五年間で教師として過ごしていたのである。

（元島根大学法文学部教授）

編集後記

昨年秋頃、古代史をテーマとする講演会が少なくなっている、と便りを頂いた。

「一畑薬師ビクターセンター」で、四十二浦巡りの信仰習俗を中心として、神話・民話、祭礼などを扱った絵・写真、島根の特産品など紹介しているので、お出かけ頂きたい。

コロナはまだ終息宣言されていないが、外出が少なくなっている方々に、手始めに、近場の旅として、新緑まぶしい島根半島を巡る散策、ビクターセンター訪問をお奨めする。

米を始めとして物価高騰は時代の変化を感じさせている。買い控え、出不精は、むしろ物価上昇を後押しすることになるので、園芸に精を出し、恐れず生活に立ち向かって行きたい。

（秋星子）

島根半島四十二浦巡り第43号

発行 令和 七年 五月 十一日

発行者 島根半島四十二浦巡り再発見研究会

事務局 TEL 090-4572-0641